

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520053

研究課題名(和文)

自然的宗教史から見たドイツ観念論思想における「悪」論とその救いの構造研究

研究課題名(英文)

The Problem of Evil and German Idealism

研究代表者

諸岡 道比古(MOROOKA MICHIIHIKO)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：70133915

研究成果の概要(和文)：

世界各地に存在する様々な宗教を知ったヨーロッパの知識人たちは、それら諸宗教の本質を探究し、その結果得られたものを自然的宗教と呼んでいる。ドイツ観念論の系譜に属するカントをはじめとする哲学者たちも自然的宗教を、その名称は異なるものの、彼らの理想的宗教として求めた。彼らは人間に存在する道徳的悪や宗教的悪をこの自然的宗教を手掛かりにして克服しようと考え、その克服時期をこの世、靈魂が肉体を離れてからのいずれかの日、あるいは復活のときにおき、悪が克服されるものとしている。

研究成果の概要(英文)：

Natural religion(die natürliche Religion) is not nature religion(die Naturreligion), but religion contemplated by philosophers. The former is a worship of mountains, rivers, trees, etc. The latter is an ideal religion that German idealists (Kant, Fichte, Schelling, Hegel) considered to be the essence of religions throughout the world they knew in their time. They sought to defeat the evil in human nature with the power of their natural religion. According to their theory of human existence, they thought that evil should be defeated in their time, or in the future, or with the Resurrection.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：自然的宗教、善と悪、救い、ドイツ観念論

## 1. 研究開始当初の背景

自然的宗教を手掛かりとすることにより、西欧哲学で提示される人間存在がより明確に把握されることに気づき、カントとシェリングに関する以前に書きためてあった論文を纏め直し、2001年に『人間における悪—

カントとシェリングをめぐって—』と題した著書を上梓した。この著書において提示した考え方が、ドイツ観念論思想における人間存在の把握に関して、どこまで通用するか、また、どのようにこの考え方が展開されているか、を辿ろうとしたのが研究開始の背景である。

## 2. 研究の目的

諸宗教の本質である「自然的宗教 *die natürliche Religion*」を求める、啓蒙期に生じた思潮の中に、ドイツ観念論を位置づけ、現代宗教学への一里塚として論じるとともに、ドイツ観念論思想における悪論とその救いの構造を宗教学的視点から研究すること、言い換えるならば、ドイツ観念論思想において理解される人間存在の有り様ならびにその人間存在の理想的有り様との関係を、自然的宗教を手掛かりにして把握することが目的である。

## 3. 研究の方法

(1) 『人間における悪—カントとシェリングをめぐって—』において検討したカントとシェリングの「悪」論を、悪の克服ならびにその救済という観点から展開し、彼らが提示する人間存在における悪を、自然的宗教(カントにとっては道徳的宗教 *die moralische Religion* が、シェリングにとっては哲学的宗教 *die philosophische Religion* が自然的宗教である)により、何時どのように克服しようとしていたかを、特にその克服時期を明確にする。

(2)カントとシェリングにおいては、人間存在の存在様態が悪であること、自然的宗教(道徳的宗教と哲学的宗教)により悪を克服し救済されたい、と考えられていたことが共通している。人間存在のこのような存在様態把握に対し、フィヒテとヘーゲルにおいて、人間存在の存在様態がどのように把握され、理解されていたかを明らかにする。

(3)フィヒテやヘーゲルにおいて、悪は「善を実現するための障害」あるいは「自由である精神が進展するために普遍的なものから分離すること」とされ、カントやシェリングにおいてのようには、人間存在における悪が重要視されていないが、その理由は何かを解明する。

以上の解明を踏まえ、自然的宗教から見て、それぞれの哲学者が考えている悪とは何か、悪とするその基準は何か、彼らが提示する自然的宗教によって、悪を何時いかにして克服するか、その構造を検討する。

## 4. 研究成果

研究成果の概略を、論文としては「宗教と倫理—ドイツ観念論思想を手掛かりとして—」(『宗教研究』、査読有、第361号、2009年、361—383頁)において公表した。また、その一般向け記述としては、『宗教学事典』

の項目「善と悪」(丸善株式会社刊、『宗教学事典』、2010年、360—363頁)において宗教学的観点から書かれた善悪の項目としてその成果を示した。本項目は従来の哲学事典や倫理学事典で示される善悪の記述とは異なった観点から書かれた善悪の記述であり、その着眼点は本研究の成果であるとともに、注目に値するものである。また、これらはドイツ観念論を宗教、特に自然的宗教から捉え直す道筋をつけたものでもある。

本研究の概要を示せば以下の通りである。善悪の概念は、従うべき法則に行為が一致するか否か、詳しく言えば、行為の格率に採用される法則と欲望との優先関係ならびにその格率に基づいてなされる外面的行為において規定される。格率において法則が欲望に対して優先され、その上外面的行為においても法則に適った行為がなされる場合に善とされ、それ以外の場合が悪である。このような規定はドイツ観念論思想において一般的であるが、従うべき法則が何を基準とするか、つまり人間の理性に基づくものか、それとも神の法則であるかによって、考え方が大きく二つに分類される。神の法則を問題にするシェリングと、人間の理性を中心に考えるカントやフィヒテとはこの点において区別される。また、理性の単なる自己規定による道徳の主観性を批判するヘーゲルは、カントの主観的道徳性の立場を踏まえ、道徳の内面性と法の外面性とを総合する、慣習に基づく客観的な人倫の立場を主張するが、彼もここでいう人間の法則に基づく立場に立つ。

どんな法則に従うかによって善悪の概念が大きく二つに分類されるが、この善悪の概念はまたいかなる領域での概念であるか、つまり道徳的な善悪、宗教的な善悪、政治的な善悪、社会的な善悪等々であるかによって意味合いが変わってくる。当然のことながら、本研究では道徳的善悪と宗教上の善悪とが検討され、いずれの善悪がそれぞれの思想家において優先されるかが問題となる。それというのも、現実世界においてどちらが優先されるかにおいて生き方が大きく異なるからであり、そこには道徳と宗教との緊張関係が見られるからである。この緊張関係を解決するには、(1)道徳的善悪を宗教的善悪に優先する、(2)宗教的善悪を道徳的善悪に優先する、(3)道徳的善悪と宗教的善悪とを一致させる、という3つの立場が考えられる。

カントは、人間がなすべき道徳的義務を行った上で、人間に可能な道徳的完全性とその完全性に見合った幸福とを結合した概念である最高善がいずれの日にか実現される、という道徳的願望を懐くことを認めるとともに、その実現を支える「靈魂の不死」と「神の存在」とを要請する。このように、道徳から宗教への移行を考えるカントは(1)の立場

に立つ。それに対し、人間を神との関係において考えるシェリングは、現実の生を否定することによって、世俗の世界と宗教との緊張を解消する。彼によれば、人間は根源悪ゆえに欲望に駆り立てられ、神の法則に反した「偽りの生」を生きる。神とのあるべき関係は罪人にとって自らを焼き滅ぼす火であるため、人間はますますこの関係から遠ざかり偽りの生にのめり込む。ところが人間は古き人間を捨て神の嘉する新しき人間を着るとき、神とのあるべき関係を初めて築くことができる。これが世俗的世界を捨て去り、神に従うことで問題解決をはかる(2)の立場であり、シェリングの見方である。これらに対し、フィヒテは人間の生を「仮象の生」と「真実の生」とに分け、仮象の生を欲望の連鎖の中に生きる人間の生とし、人間が生きるべき真実の生を生きていない生とする。この仮象の生は不道德な状態にある、世俗的世界の生き方でもある。真実の生を生きるには高次の道徳性の立場が必要であり、感性的世界の秩序にすぎないストア派やカントの道徳では不十分である。高次の道徳性の立場は、感性的世界つまりこの世俗的世界において、真の超感性的世界である神的世界を作り出す、とするフィヒテは、道徳的善悪と宗教的善悪との一致を考える(3)の立場に立つ。このように、それぞれの哲学者は自らの思想、特にその人間観に基づいて(1)から(3)のいずれかの立場を取る。

(1)から(3)のいずれの立場に立つにせよ、カントであれ、フィヒテであれ、シェリングであれ、ヘーゲルであれ、いずれの哲学者も現実の世界において悪が克服され、神的世界が実現されている、としているわけではない。カントやシェリングのように、人間本性に根本悪や根源悪の内存在を認める場合であれ、フィヒテのように、生に関する五つの見方を提示し、その二段階までのあり方を道徳的あり方ではない現実の生のあり方とする場合であれ、自由である精神が進展するために普遍的なものから分離し、現実的な生を否定的に媒介するヘーゲルの場合であれ、悪の克服が現実の世界においてなされていないことを認めている。彼らは人間存在の現実的存在様態が悪であることを認めた上で、自然的宗教により悪しき存在様態の克服を考える。

カントは自然的宗教の一つである「道徳的宗教」を持つことによって、人間がいずれの日にか根本悪を克服し真の幸福に与りうることを希望し、道徳的慣行の改善とともに「心の革命」により善き格率を採用し道徳的努力をするように促す。シェリングは神話の宗教とキリスト教とを媒介するものとしての「哲学的宗教」こそ真の宗教であるとし、この哲学的宗教によって人間は本性に内在する根源悪を、神との関係の再構築という形で、

善と悪との闘争の時代である「今の世」が終わる「復活の時」に克服するとする。フィヒテは、人間が最高の自由によって自己の計らいを止め、自己を無化することによって、生に関する見方を転換し、道徳的宗教的人間になることにより、浄福をこの世において獲得できるとする。つまり自分自身を無化することにより、自分自身を精神世界の法則へ従わせ、高次の道徳の立場を獲得し、神の中に沈潜して生きるのである。この立場は、フィヒテによれば、「真の宗教」によって直接捉えられることにより獲得されるものでもある。言い換えれば、高次の道徳性と宗教とは一致するものであり、フィヒテは両者に、自らの計らいをなくす道徳的努力をして神的生活をするか、あるいは、直接捉えられて神的生活を営むかの違いを認めるだけである。高次の道徳性においてであれ、真の宗教によってであれ、フィヒテはいずれにせよ、この世において神的生活つまり浄福なる生活を営むことが可能であるとしている。

以上のように、研究成果の概要を纏めることができる。善悪の基準を何に求めるか、道徳と宗教との関係をいかに考えるか、人間存在の現実的存在様態をいかに捉えるか、自然的宗教により現実的存在様態をいかにして理想的存在様態へ導くか、その達成時期はこの世であるのか、カントのように肉体を魂が離れた後のいずれの日か、それともこの世の終わるときであるのか、という点はそれぞれの哲学者の思想、特に哲学者が考える理想的宗教つまり自然的宗教から捉え直された人間観に依存していることは明らかである。

このようなドイツ観念論思想の捉え方は、国内外においてみられないものであり、極めて独創性に富んだ研究といってよいと思われる。またドイツ観念論思想の人間観を宗教学的視点から明らかにする研究でもある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

(1) 諸岡道比古 「フィヒテとシェリングのヨハネ解釈をめぐる」、『人文社会論叢—人文科学篇—』、査読無、第24号、2010年、1—15頁。

(2) 諸岡道比古 「後期シェリングにおける神」、『シェリング年報』、査読有、第17号、2009年、38—47頁。

(3) 諸岡道比古 「宗教と倫理—ドイツ観念論思想を手掛かりとして—」、『宗教研究』、査読有、第361号、2009年、361—383頁。

〔学会発表〕(計 4件)

(1) 諸岡道比古 「シェリングとヘーゲルにおける神について」、日本宗教学会、2010年9月、東洋大学

(2) 諸岡道比古 「後期シェリングにおける神」、日本シェリング協会、2009年10月、弘前大学

(3) 諸岡道比古 「フィヒテとシェリングにおけるヨハネ解釈について」、日本宗教学会、2009年9月、京都大学

(4) 諸岡道比古 「後期フィヒテ哲学の宗教論再考」、日本宗教学会、2008年9月、筑波大学

〔図書〕(計 1件)

(1) 諸岡道比古、他、丸善株式会社刊、『宗教学事典』、「善と悪」、2010年、360-363頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計◇件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

諸岡 道比古 (MOROOKA MICHHIKO)

研究者番号：

70133915

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号：